

多高通信

第152号 平成30年3月29日発行



さどく ゆたかに たくましく
宮城県多賀城高等学校

祝 40回生卒業おめでとう!!

3月1日、第40回卒業証書授与式が行われ、多賀城市長・菊地健次郎様ほか、たくさんのお来賓の方々の御列席を賜り、多くの保護者に見守られながら、40回生277名が巣立ちました。

■送辞 小畑友哉

(2年3組 しらかし台中出身)
二年前、私たちが入学した時、先輩方は優しく私たちを迎えてくださいました。そして、不安でいっぱいだった私たちがよき手本になってくださいました。先輩方が優しく接してくださったことで行事や部活動に全力で積極的に参加することができました。



卒業証書の授与



■答辞 卒業生代表 木村千恵
卒業を迎えた今、振り返ると多賀城高校で過ごした三年間は非常に充実したものでした。多高三大行事の球技大会、多高祭、体育祭では、すべての行事で皆の笑顔が輝いており、各クラス思いのTシャツに身を飾り、クラスとして学年の団結が生まれました。この絆は、受験勉強の際の「皆で取り組もう」という強い思いに繋がりました。部活動においても、友の努力する姿、喜びや悔し涙に接して、自分ももっと頑張ろうと背中を押されました。

今日のこのよき日に、私たちは卒業します。私たちは卒業しても、多賀城高校で培った誇りを忘れず、これからも「さどく ゆたかに たくましく」日々邁進していきます。

JICA 国別研修 防災教育コース

トルコの教育関係者視察



1月25日、国際協力機構(JICA)の国別研修事業の一環で来日しているトルコの教育関係者ら14名の皆さんが、日本の防災教育の現状を視察するため本校にやってきました。宮城県や本校の防災・減災教育活動について県教育庁スポーツ健康課長や校長から内容を紹介します。

デイスカッションの後は実際の授業の様子を皆さんに見学していただき、普通科1年生の英語の授業には一緒に参加もしていただきました。お互いにたどたどしい英語(トルコの方々はトルコ語なので、英語はほとんど話せない)とタブレットの翻訳機能を活用してコミュニケーションを図り、お互いの文化を学び合いました。生徒たちは自分たちで工夫して、折り紙の作り方を動画で説明したり、けん玉を演じたりして、日本文化をトルコの方々に紹介していました。トルコの方がけん玉に成功したときには大きな拍手が起きました。トルコは日本と同じく地震の多い国で、国民

教育省教員養成総局のアクテキン・セミシ局長は、「日本は災害に備えてしっかり準備していることが分かった。トルコの防災教育システムに今回学んだことをしっかりと生かしたい。」と述べていました。



翻訳機能を使ってコミュニケーションを取ります

■生徒の感想

トルコの方々と交流はとても楽しかったです。トルコ語と日本語という言語の壁はありましたが、翻訳アプリなどを使いながらも、お互い伝えたいことを伝えられたと思うので良かったです。とても良い経験になりました。言葉の壁は大きく、まったく伝わらずに終わってしまった話題があったり、自分の英語力の至らなさを痛感しました。トルコの方々は、とても優しく、熱心で、とてもフレンドリーだったので、緊張もすぐにほぐれてとても楽しかったです。最後には、一緒に写真を撮っていただき、貴重で素敵な思い出になりました。「トルコには是非おいで！」と行ってくださったことがとても嬉しく、いつまでも記憶に残ることだと思います。

吹奏楽部・合唱部

かたりつき

朗読と音楽の集い

中島 萌絵(1年5組 宮城野中出身)
小林 桜子(1年6組 多賀城二中出身)



吹奏楽部による伴奏「believe」 竹下景子さんと合同合唱「愛の色」



吹奏楽部による伴奏「believe」 竹下景子さんと合同合唱「愛の色」

私たちが多賀城高校吹奏楽部と合唱部は「かたりつき」に出演させていただき、合同で「believe」「愛を込めて花束を」「わせねでや」を合唱しました。「わせねでや」の作詞者の想いを聴いてくださる方々に伝えようと皆で歌うと、あの日の情景が浮かびあがり、震災の経験は次の世代に伝えなければならぬと思います。私たちができることは、音楽で何かを伝えることだと思います。想いを皆様に届けるにはどうしたらよいかを考え、曲の繋ぎを短くし手話を使うなどの工夫をしました。本番では、精一杯の演奏をすることができました。涙を流して聴いてくださる方々や終了後に直接声をかけてくださる方々もいらっしゃり、素晴らしい時間と想いを共有できました。あの日から7年が経ち、私たちの中でも少しずつ記憶が薄れていくことを感じる中で、震災を伝えていくことの大切さを改めて実感する機会となりました。

理数科課題研究発表会

3月15日、平成29年度宮城県高等学校理数科課題研究発表会がトークネットホール仙台(仙台



市民会館)で行われました。仙台第三高校、仙台南山高校、宮城第一高校に本校を加えた4校で取り組んできた課題研究の成果を発表するもので、本校からは「東日本大震災による植生の攪乱と生物の応答」浦戸諸島、ハイブリッド松に迫る(災害科学1年)、「塩竈地域松島層の年代測定」(災害科学2年)を発表しました。これまでの研究成果を12分間の持ち時間で丁寧に解説し、口頭発表後に行われる質疑応答でも明確に回答していました。

発表会の最後に、指導助言者である山形大学の栗山恭直先生から、「面白い発表があつて大変良かった。進級してもこれまでの研究テーマを掘り下げたり、後輩にテーマを引き継いで研究を進展させてくれることを望みます。」、宮城教育大学の内山哲治先生からは、「発表することは大変難しく、上手く伝えられていないところもあった。高校での課題研究は、研究に取り組む短い時間のなかでデータをしっかりと集めることが重要で、この経験が大学での研究につながる。」と講評をいただきました。

国土交通省特別授業

3月16日、2学年地理B選択者を対象に、災害に関する特別授業が行われました。国土交通省東北地方整備局東北技術事務所所長の稲葉護氏を講師としてお招きし、「風水害から命を守るために」をテーマに授業をしていただきました。普段教室で学んでいる地理の知識を踏まえ、国内の災害の歴史の側面や現状、そして災害との向き合い方について、具体的な事例と緻密なデータを基に考えを深める貴重な時間となりました。

「いつでもどこでも風水害は起こりうる」という稲葉所長の言葉に、単なる興味・関心、知識だけでなく、防災や減災という観点から学習することができました。一人でも多くの命を守るよう、今できることを科学的に分析しながら、学びを深めていこうと思います。



「平成29年度東日本大震災メモリアル day 2017」(みやぎ防災ジュニアリーダー養成研修会 主催・宮城県教育委員会／主管校・宮城県多賀城高等学校)が3・11を前にした3月3日・4日の2日間、全



国の高校生12校26名と、県内の高校生13校120名余りが集い、盛大に開催されました。

1日目はまず、被災地を巡る「被災地スタディツアー」からスタート。震災遺構である仙台市立荒浜小学校と南蒲生浄化センターを見学しました。荒浜小学校では震災犠牲者に黙祷を捧

げたあと、当時の同校校長先生であった川村さんの案内で見学。荒浜小学校には2階部分まで津波が浸水(浸水深7.8m)し、地元住民と児童・教職員の300人余りが避難しました。当時の津波襲来の恐怖と避難誘導の様子を詳細に語っていただきました。また、南蒲生浄化センターでは、ポンプ棟を直撃した津波の威力を実感するとともに、水道や電気のほかに下水道も重要なライフラインであることを再認識しました。



南蒲生浄化センターの見学

1日目のメイン会場であるホテルキャッスルプラザ多賀城に移動し、開講式と基調講演、ワークショップなどを行いました。開講式では、主催者である高橋仁宮城県教育委員会教育長があいさつ。「皆さんもご存じのように、防災・減災に関しては「答えが一つではない」ために、まさに人間の英知を結集して取り組んで行かなければならない

今村先生の基調講演



分野であり、「命と生活」を守るこれらの学習は、まさに人間生活の根源に関わる場所です。」とした上で、東日本大震災の経験・教訓を継承し未来の減災に貢献していくことなど本研修会の目的が伝えられました。

開講式に引き続き、東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長による基調講演が行われました。今村先生からは、科学技術に裏付けされたデータを使った大震災のメカニズムの説明や、地震発生直後の緊急災害情報に関するトレードオフについてわかりやすい解説がありました。そして、「分野を超えた多角的な側面からの研究と連携がよりよい安心・安全な社会を拓いていくのではないかと考えられます。」と、この研修会に対する期待のこぼれをいただきました。

基調講演後には「被災地スタディツアーから学ぶこと」をテーマに、参加した高校生が16のグループに分かれワークショップが行われました。参加した生徒からは、「今まで以上に直接意見を交換できる場ができて、いろいろな考え方を学ぶことができました。実際に被災された現場を見たことで、防災・減災に対する深い知識を得られた気がします。」という感想が聞かれました。最後は代表グループによるクロストークでワークショップが締めくくられました。

ワークショップ



代表生徒による発表

東日本大震災メモリアル day 2017

みやぎ防災ジュニアリーダー研修会

2日目は、県内外の各校と多賀城高校災害科学科1・2年生によるポスターセッションが行われました。各校とも防災・減災を切り口とした様々な発表をする中で、経済問題や社会問題など多角的な視点で研究した学校もあり、質問が多く飛び交う活発な会となりました。



ポスターセッションの様子

講評に立った兵庫県立舞子高校の谷川彰一校長先生は、「今後は、様々な人々が防災・減災の取り組みについて興味・関心を持てるようにしていかなければならない。危惧されている南海トラフ大地震では、最大32万人の犠牲者が予測されているが、人々の防災・減災意識を高め、備えをより充実させれば、約98%が助かるとの想定もある。したがって、ここにいる防災ジュニアリーダーの皆さんには防災・減災に向けたさらなる取組と活動、そしてその発信が求められている。それぞれの学校や地域での今後の活動を大いに期待します。」と語っていただきました。

ポスターセッションの後、「みやぎ防災ジュニアリーダー」の認定証授与式が行われ、県内高校生に認定証が授与されました。代表で塩釜高校の高橋咲楽さんが授与し、防災ジュニアリーダーとしての抱負を力強く語っていました。

午後からは、多賀城高校生の案内で多賀城市内を巡る「まち歩き」を実施。二日間で培った友情を抱きながら、お互いの今後の活躍と再会を約束して研修会を終えました。

■参加生徒の感想

○高岡西高校(富山)
災害についてたくさんのお話を学ぶことができました。自分た



認定証授与式

ちの県ではありえないことばかりで、すごく驚きました。友達や家族・地域の皆さんに今回学んだことを伝えたり、新しくもたらした意見などを踏まえて、学校に持ち帰って、これからできることを考えたいです。また、1泊2日をともにして仲良くなった方々ともこれからも交流を深めていきたいと思っています。

○新潟県中央工業高校(新潟)

実際に東日本大震災の被害にあった荒浜小学校や南蒲生浄化センターに行き、津波の高さや怖さを知り、またこのようなことが起きないように、防災への取り組みを強化すべきだと思いました。特に、南蒲生浄化センターでは7年近くたった今でもまだ工事が続けられていることや、梁があるところのないところで被害の大きさが異なることに驚きました。

○桜美林高校(東京)

とにかく被災した現地の生徒と東京の生徒との間で意識の差が大きいなと思いました。当事者だからこそ知っていることやできることなど、ある意味では部外者である僕たちとの大きな差があるなと改めて思いました。

過去のことだけを学んで満足しているのではなく、もっと未来へ目を向けて、ここでしか知り得なかったものを、僕らから東京の人たちへ発信していこうと思います。「高校生・大学生だからこそできる活動」というものを意識して、これからの活動につなげていきたいと思います。

■熊坂あゆみ(1年7組 高砂中出身)

最も印象深かったのは荒浜小学校の見学でした。天井がぐちゃぐちゃに倒壊したものが多々ありました。「震災を風化させない」ということは誰もが思っていることだと思いますが、ただそれだけを考えていても何も変わりません。実際に足を運び、どのようにすれば風化を防ぐことができるかを積極的に考えていかなければならないと改めて思いました。また、中学生や県内外から本校以外の高校生が多く参加し、たくさんの方と交流ができました。1日目の最後にはファシリテーターの経験もでき、人の意見への対応の仕方や議論のまとめ方などを学ぶことができました。

今回のメモリアルdayに参加し、被災地の現状を自分たちの目で再認識でき、県外の高校生にも伝えることができたと思うので、この経験を生かし、今後の活動に取り組んでいきたいと思っています。



まち歩き・末の松山での様子